



Title	環境配慮行動における介入による長期的な行動変容 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	森, 康浩
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12084号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/61658
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yasuhiro_Mori_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 森 康浩

主査 准教授 大沼 進
審査委員 副査 教授 櫻井 義秀
副査 准教授 瀧本 彩加

学位論文題名

環境配慮行動における介入による長期的な行動変容

本論文にとりまとめられた研究成果は、既に査読付学術論文として刊行済み 1 編、掲載決定 1 編と、審査中の英語論文 1 編（2016 年 2 月 22 日付、掲載決定通知）の、計 3 編の査読付学術論文をとりまとめたものである。

環境配慮行動の先行研究は膨大にあるが、質問紙だけでなく実際の行動観察データを分析しているものは多くない。そのうち、具体的な介入を行いその効果を検討した研究は少ない。さらに、その長期的な効果を追跡した研究は希少である。いずれも、その重要性は兼ねてから論じられてはきたが、労力が多いことや現場での様々な制約や調整が必要であることなどのために実際には実施が困難であり、現場での実証データの蓄積が不十分であった。本論文は、丹念な観察を長期間にわたり行い、その分析を行っているだけでも、貴重な実証データを提供している。具体的には、4 週間にわたる介入に続く 3 ヶ月のフォローアップ調査、1 年にわたる家庭でのエネルギー使用量の把握と、介入前、半年後、一年後の 3 波にわたる質問紙調査、そして、約 800 のごみステーション観察と 3000 世帯以上を訪問して得たアンケート調査に基づくデータの照合などである。

さらに、長期間にわたる研究をおこなったことで、従来効果があるとされてきた介入方策を、短期的にしか効果のないものと長期的に効果の持続するものとに分類整理することができた。例えば、経済的誘因に象徴される外発的動機付けは短期的な効果しかなく、面白い・楽しいといった内発的動機付けは長期的な行動の持続に効果がある。また、“社会の目”のような社会規範はそれが存在している間は有効だが、それがなくなったとたんに効果がなくなるのに対し、そこに住む同じ住民が協力したという情報のフィードバックは、短期的には効果が弱くて長期的にはリバウンドを起こしにくいことなどを明らかにした。これらも従来から部分的には指摘されていたが、そのほとんどは十分な実証データを伴ったものでなかった。本研究では現場における実証データとその分析から説得的に示している点で、当該研究領域における貢献が大きいと認められる。

加えて、コミュニティといえば従来は町内会などに象徴される地縁的な伝統的な繋がりに頼った取り組みが多かったが、その問題点や限界点も指摘されてきた。これに対して、本研究では、町内会とは異なるネットワークを見出し、またそれを形成する可能性を示唆しているという点で、実践的な提言も加えている。すなわち、町内会などの機能は依然として重要であるが、それとは異なる位相の人々が自然発生的に集まる“空間”が存在していること、その“空間”は公園などの公共空間の整備の仕方を工夫することでつくるのが可能であることが論じられている。多くのコミュニティ再生の議論がその取り組みに熱心な住民を中心とした視点で語られるのに対し、地域と関わりが薄い人々の行動観察を元に論じている点に独創性がある。

これらを総合的に俯瞰し、効果的な介入のあり方について、長期的な視点から再整理していることも評価できる。つまり、本論文は、研究者が現場に介入を行ってその効果を測定したものであるが、最終的には、そこに暮らす人々が自身の手で取り組み、行動を変容し、変容された行動を持続される仕組みを作ることの意義を強調し、その道筋を具体的に記述している。

ただし、本論文で取りあげられている環境配慮行動がどのような特徴を有しているのか、また、環境配慮行動と他の向社会行動や逸脱行動との異同についてなど、よりメタな視点からの議論に物足りなさを感じる。しかし、地に足をつけて地道に観察を行い複雑な分析を積み上げたことを鑑みれば、この点は本論文の価値を損なうものではないと判断される。